げ、そこから帰納される古代インドの商業活動の諸面を理論化して説明すべきであったように思われる。史料を挙げての実証手続きはかなり粗雑であり、しばしば異なった時代の史料が順不同に並記される。またフェニキヤ人を『リグ＝ヴェーダ』に登場するパニ族と同一視し、インド起源の彼らが世界貿易の独占を目指して地中海に進出したことを論ずるなど（三三―三五頁、四七―四八頁）、さほど可能性をもつと考えられない学説が、しばしば動かし難い史実のごとく論じられている。このように多くの疑問点を含む著書ではあるが、貨幣制度、金融制度、輸出入組織など古代経済上の重要問題を理論的に把握しようと試みた著者の意欲は、評価されねばならないであろう。

(Moti Chandra, *Trade and Trade Routes in Ancient India*, Abhinav Publications, New Delhi, 1977. xxiv+259 p.+10 pls.+2 maps.

Prakash Charan Prasad, *Foreign Trade and Commerce in Ancient India*, Abhinav Publications, New Delhi, 1977. xvi+255p.)

G・オーベルハンメル編著
超絶の経験、その達成の限界

辻　直四郎

本書の表題を精確に訳出することは容易でなく、却って不明瞭となることを恐れ、ここには趣旨を汲んで簡略にした。これは一九七七年二月九日から一四日にわたり、ウインで催されたシンポジウムに提出された論文を、オーベルハンメル教授が編集出版したものである。主要部分は二部からなり、第一部（p.15～134）はインド関係の論文七篇を、第二部（p. 137～234）はキリスト教神学関係の論文四篇を収めている。第三部（p. 237～239 :Verantwortung des Herausgebers）は附録で、さらに人名と項目との索引が添えられている。

「超絶」（Transzendenz）の問題は、いずれの時代においても、いずれの宗教にも関係をもつ重要な題目である。本書に集められた論文の執筆者は、おのおのその専門の観点からこの困難な課題を取りあげて蘊蓄を吐露している。編集者はまず冒頭に問題を提起し（p. 7～12）、問題の所在を明かにしている。本書の最も重要な部分は、広義における宗教学の領域に属するから、その紹介或いは批判は斯学の専門家にゆだねられなければならない。従って本稿の筆者のごときヴェー

ダ文献学者の口を挿む余地はない。しかしヴェーダ祭式或いはヒンドゥー教一般も、「超絶」に全く無縁ではないから、あえてここにオーベルハンメル教授の依頼に応えることとした。

本書を構成する各論文の内容を詳細に紹介し或いは評価することは、筆者の能力を遙かに超えている。全般にわたる細説は専門家にゆずるとしても、読者に内容を略示することすら容易ではない。術語の和訳が未熟であるため、却って読者をまどわす恐れはあるが、本書に扱われている問題の広汎な範囲と深い思索の結晶とを伝えられれば幸甚である。第一部においては、サーンキア的ヨーガの超絶問題(G. Oberhammer)、ヴェーダ祭式と超絶(J.G. Heesterman)、シャンカラにおける体験不可能事(Unerfahrbares)の体験(T. Vetter)、アビナヴァグプタにおける最高経験の仲介不能説(Unvermittelheit) (B. Bäumer)、スフィズムと誠信(Bhakti)との関係(A.R. Crollius)、インド仏教における解脱経験の構造(L. Schmithausen)、仏教におけるヨーガ的認識(E. Steinkellner)が並び、次いで第二部に移って、カトリック教理から見た超絶経験の問題(K. Rahner)、超絶とグノーシス(E. Lanne)、ドイツ神秘主義の理解による超絶経験(A.M. Haas)、誠信と知識(Jñāna) (P. Schoonenberg)が載せられている。読者はもちろんそれぞれの興味に従って選択吟味する自由をもつが、本稿の筆者はその専門とするヴェーダ学に最も関連の深い一篇を紹介するに止める。すなわち J.G. Heesterman: Vedisches Opfer und Transzendenz (p. 29〜44)である。

インドにおいて祭祀と超絶とは最も密接に結合され、祭祀はインドの宗教思想および社会思想の根本的課題に属する。天啓による聖典ヴェーダはほとんど全く祭祀にかかわり、普遍的世界秩序ダルマ(Dharma)「法」はヴェーダに基づくとされている。純粋にヴェーダ的とはいわれない祭祀についても同様である。

しかしダルマのヴェーダ依存は'pia fraus'であり、祭祀一般の性質に対する誤解、特にヴェーダ祭式の行事の誤解に由来する。祭祀に関する明瞭な視点を遮るのは、祭祀と布施との混同である。超絶はいかなるシステム、いかなる秩序にも拘束されず、その予測不可能な点において恐怖と死の危険とに満ちている。この意味において祭祀は、その本質に従って、危険に満ちた恐るべき冒険である。祭祀と布施とは相互関係(do-ut-des)を遠く踏み超えている。

ヴェーダ祭式の行事に関し、祭祀と世界秩序とを密接に結合させて考えることは誤謬である。世界秩序を妨げるものは、むしろ危険と苦難とを伴う恐るべき祭祀である。著者はこの一見矛盾に満ちた関係を説明するため、ジャイミニーヤ

・ブウーフアナの一節、ストゥーラ（Sthūra）のサットラ祭（Caland: Das JB. in Auswahl, Nr. 156）を例証として挙げている。ここで究極の成功に導くのは、祭祀の正統の完了ではなく、却って祭祀の恐るべき破壊力である。

祭祀についてのかかる経験は、他の宗教においても見られる現象である。インドの大叙事詩マハーバーラタの結末は、祭祀の両面、平穏と恐怖とを、非常に顕著に示している。人間により考案され実行される秩序の中には、超絶の予知すべからざる作用に対処する余地はない。神々も天界も輪廻に束縛されて自由ではない。しかし時代と共にヴェーダ祭式にも変化が起り、古典期においては技術化された。古典期の祭祀の組織は、所詮それが超絶の不安定性を克服するに足りないことを認めさせている。

祭祀が超絶に達するために十分でない以上、人はいかにすればよいのか。ここで著者は朝夕行われる最も単純な祭祀アグニホートラ（Agnihotra）の考察に移る。その絶大な効験の宣揚にもかかわらず、また超絶との接触から起る危険な結果を除去するための努力にもかかわらず、結局超絶を克服して確実にこれに到達することは不可能である。

著者はさらに進んで、古典期ヴェーダ祭式の終極ともいうべきプラーナ・アグニホートラ（Prāṇāgnihotra）を解明する。実際において、これは祭火と見なされる生気の中に供物として食物を捧げるに過ぎない。しかし祭祀はヒンドゥー教の中枢でないことが知られ、重要性において祭祀に勝る「知識」も、究極の中枢的要素となすに足りない。以上のごとく次々に超絶への接近を試みても、結局人は矛盾を完全に克服しえず、目的に到達することはできない。行文の屈折起伏の中に論じ来たり論じ去ってこの難問に対決した著者は、次の語をもってこの示唆に富む考察を結んでいる。"Der Ausgang bleibt unsicher, denn letzten Endes ist die Transzendenz ein Absprung ins Unbekannte" (p. 44).

(Transzendenzerfahrung, Vollzugshorizont des Heils. Das Problem in indischer und christlicher Tradition. Arbeitsdokumentation eines Symposiums, herausgegeben von Gerhard Oberhammer. Publications of the De Nobili Research Library, vol. V. 253 pp., Wien 1978.)

クラウス・ミュリウス著

サンスクリット文学抜粋集

辻　直四郎

著者自身も述べている通り、本書に最も近い抜粋集として